

JGN全国大会（下北大会）参加レポート

所属 NPO 法人有珠山周辺地域ジオパーク友の会

職氏名 事務局長 三松 靖志

このたびの助成対象となった JGN 全国大会について次のとおりレポートします。

■全体会について

別紙日程の2泊3日で行動した。

当会が JGN 表彰を受けることとなり、開会式に出席した会員7名が登壇。JGN 副会長より表彰を受け記念撮影を行った。長年の苦勞が報われ、会を下支えいただきながら、会とともに歩んでこられた会員にこの喜びを伝えたいと感じた。

猛威をふるった台風10号のために西日本を中心に100名のキャンセルが発生した。開会式会場はそれを感じさせない満員状態で約800名が参加した模様。

■エクスカッション（大湊・芦崎コース）

会場～20分程度で海上自衛隊大湊基地に到着し、広報係の隊員により人員確認・誘導が行われ、普段は決して立ち入れない区域に進出した。芦崎は日本最大級の砂嘴で、大潮の時期には市民開放（1400円）していたが、基地の前が干潟になり、アサリが取れる場所。コロナ等諸要因により実施は難しくなってきたが、海洋環境の変化もある。アマモという回送が成長しない、湾が浅くなってきたなど地球温暖化の影響もある模様。

途中、雷雨により退却した（沼田ガイドの臨機応変な対応に感心した）。主催者のしもきた TABI アシストに連絡を入れ、行程変更を願い出て承認され、ようやく行程変更。

北の防人資料館（日本最古の重力式貯水池含む）を見学した。

明治時代、この地に軍港を開くにあたり最も最重要視されたのは水の確保であった。

軍艦や駐留する軍人の生活用水など、背後にある釜臥山からの澤水を集め、それを分配する井戸が国の重要文化財となっている。

釜臥山は港の背後を固める守りに適し、津軽海峡に睨みをきかせる位置関係も軍港として申し分ないそうである。また、津軽海峡から陸奥湾に流れ込む海流の影響で釜臥山の土砂は一定方向に流れて砂嘴を形成し内湾には田名部七湊という北前船立ち寄りの際の港が栄、青森ヒバを全国に出荷。江戸の大火・岩国の錦帯橋・中尊寺金色堂の覆い堂などは全てここから積み出された青森ヒバだそう。

マエダアリーナに戻る途中、カモシカを発見。平気で人里に出てくるが天然記念物のため駆除もできない。4～50年前までは普通に食べていたらしいが、現在の環境保護のもとではどうにもできず市民は家庭菜園の野菜を守ることに苦心している。

■大交流会

NPO 有珠山周辺地域ジオパーク友の会の JGN 表彰を祝う声が多数。

感謝の意を伝える。友の会の活動について聞かれることも多く、ガイド養成講座や火山防災啓発活動、他ジオパーク訪問による交流事業、手工芸部会活動のほか、広報活動など幅広く

説明。交換した名刺は60枚を軽く超えた。

終盤、次年度開催の十勝岳 GP を代表して斉藤上富良野町長より挨拶があった。参加者からは来年も必ず行く、という力強い言葉をいただいた。

■ガイド交流会

洞爺湖有珠山からは三松のみ参加。

全体で70名ほど参加の様様。西日本からは桜島の吉田氏・島原半島の永田ガイドらが参加。下北ジオパークガイドの会の原会長があいさつ。「濱石ガイドが立ち上げ、ここまでくるとは思わなかった」という挨拶に胸が熱くなった。(濱石ガイドは霧島大会分科会で三松と同グループになり、いろいろ相談を受け、ジオ友下北研修企画の際にフルで随行いただいた方。昨年、大会の開催を見ることなく逝去)

■まんぷくまさかりマーケット

出展者数が110ブース。地方都市では考えられない大規模なマーケット開催。

当会からは手工芸部会が沿道の景観保全やジオサイト維持の際に発生した樹皮で編んだ籠を販売。総売上が88000円ほどになったほか、JGNの古澤事務局長が相当興味深そうに説明を聞いていた。数点をお買い上げになり、ベトナムジオパークに紹介することのこと。

■分科会6

大地と自然と人をつなぐフェノロジーカレンダーの世界

コーディネーター（世話人） 磐梯山ジオパーク

文教大学教授の海津えり子氏（元々はエコツーリズムが専門）によるフェノロジーカレンダー（地域一体となった地域歳時記）製作を通じての地域の魅力や伝え方の見直し、情報の連続性や関連性を網羅させる手法について実践形式で学んだ。

7グループに分かれそれぞれのジオパークについて地域の「食」についていつ、どのように栽培や採取を行い、人の手が加わっているか？自然現象として何が関連しているか？など模造紙上に落とし込んで検証。グループ発表を行った。

当グループは5名 三松・箱根ジオパーク荒木氏、八峰白神ジオガイドの会長斉藤氏、山陰海岸ジオパーク岩美町役場職員の山本氏、磐梯山ジオパーク金氏であった

八峰白神ジオパークではギバサ（アカモク）と呼ばれる海藻が育つのは白神山地からわずか18kmの河川（真瀬川）を水が下り、人家も少ないため生活排水も少なく、良質なギバサが育つとのこと。そこに12月に岸寄りしたハタハタが卵を産み付け、それが強風により岸辺に打ち上げられる。その瞬間のハタハタの卵が最もおいしいという。

このようにテーマ性をもったジオを語れるカレンダーがあると、子どもたちや地域でものを考えるとき、観光協会窓口などでも非常に重宝する。

銚子ジオパークの事例では、関東ローム層は栄養に乏しいが、豚を飼うことにより肥料の供

給が可能で、年間通じて温暖で気温差が無いため、柔らかいキャベツ栽培が有効。

このようにジオと人の暮らしが密接に結びついたストーリーを語れば語るほど、フェノロジーカレンダーの価値があがってくるということが理解できた。

洞爺湖有珠山ジオパークでも導入してみても面白い（伊達野菜など）。

参考までに「洞爺湖有珠山ジオパークフェノロジーカレンダー」を別添のとおり作成してみた。1名では思いつくコンテンツに限界があり、これをジオパークワーキンググループで作成し、パンフレットを作成しジオガイドがツアーのたびにお客様に渡せば面白いと思った。

■まとめ

ジオパーク全国大会に自費で参加してでも来たいという人が多く、洞爺湖有珠山ジオ協では補助を出して全国のジオメイト（青森、宮下県知事の造語）との交流を促進させる事業を積極的に取り組んでおり、ジオ友でも会員向けに制度を作っている旨、説明すると大変うらやましがられた。

それぞれの地域で様々な課題（財源不足、人手不足、高齢化、活動の停滞、人材育成の難しさ、分裂、停滞等）を抱えながらも地域愛、ジオパーク愛からこの活動に参加し、全国の同様な境遇のジオメイトと立場や世代、職業の境界を越え、価値を共有できる会には他にないと改めて強く感じたところである。その結集が大交流会であり、ポスターセッションや会場での交流などを通じて、より実感できることがこの大会の良いところである。

全国大会未経験のマイスターや若いジオ友会員には休みを取ってでも是非経験してもらいたい。それが後進の育成には最も近道である。

- ・人口10万人居たはずのむつ市が現在は人口7万人。そんな中、自衛隊が陰日向に協力してくれたほか市役所職員の超人的なボランティアの物量に恐れ入った。行政トップの指導力の賜物と感じた。翻ってみれば、次年度の十勝岳大会は圏域人口2~3万人の中で、1000人規模の大会をきめ細やかに運営していかなければならない。オール北海道で手伝える準備を今から整えておくべきだと感じた。

エクスカージョンを全道に分散させるのも手であるが、高くて催行中止になるようなものならば、最初から低額で十勝岳近郊に集約させるのも手である。昭和新山ジオツアーは実証実験を重ねれば次年度に商品化も視野に入れられると思われるので、協力していきたい。

- ・当会をJGNにご推薦いただいた加賀谷室長を始め、関係者の皆様に心より感謝します。

以上

